俳句

（２０２３）

目次

歳時記俳句　1～
モーロク俳句　5～
たべもの俳句　10～

＜師走＞
僧がお経をあげるために東西を馳せることから、「師が馳せる月」→「しはせつき」→「しわす」となったといわれています。「師」は「僧」を指すのが一般的。「馳せる」は「走る。急いで行く」という意味です。
季節：仲冬（ちゅうとう）　※大雪から小寒の前日まで。

（宇佐美保幸）メール・yasuyuki.usami@gmail.com

毎日の俳句は次のブログに
巣鴨とげぬき徒然俳句
https://blog-haiku.777usami.com

ニュータウン日が差してをり十二月
十二月深き吐息が数知れず
極月も急ぎ急がし救急車

極月も金の亡者の兜町
極月や格差あれこれ思うとき
極月のつぺらぼうのディスプレイ
極月や家族写真も終活し
極月の人は人なり我は我

誰を呼ぶひそやか声で竜の玉
聞くまじそれも運命海鼠かな

かみ合わぬ国会議論冬薔薇
シャッターの手前で逃げる冬の鳥

ニュータウン一日寒風吹きつのる
諦めてポインセチアの白選ぶ

赤燃えるポインセチアの裏事情

我もまたいずれ寝たきり山眠る
無添加の男になりたい冬麗

人生に信号機あり青木の実
雨止みて朝のぼんやり冬日かな

寒禽が小枝選びて遊びけり
人間がロボットになる冬の雨
冬の雨ベランダ叩く音を見る

我もまただんだん溶ける霜柱
冬眠の熊の寝息は穏やかか
冬眠す死を忘れたり永遠に

夫婦していついつまでも冬籠
ブログ書く生存証明冬籠

東京は乾きに乾く冬木の芽
冬ざくらワイン赤白ロゼワイン
孤独など恐れることなく冬木立

数へ日も子らは模試に明け暮れて
冬枯れの小さき庭に目白来る

人生を全うできず冬銀河
リスキリング果つることなし冬銀河

池袋中華街にもクリスマス
シクラメン改良重ねクリスマス
立ち飲み酒場男の背中クリスマス
潜水艦海の底にもクリスマス
トラックがライブハウスにクリスマス

ちやんちやんこはおり自炊の男いて

脳トレも無駄な努力にちゃんちゃんこ

線線線この空絡み年の暮
うわの空はいはいはいと年の暮れ
国会は無駄な議論で年を越す
ニュータウンすべて家々年詰まる
処方薬だんだん増えて年暮れる

街中華今日も常連着膨れて

新築の高層マンション松立つる
門松や三途の川の向こうにも

すきま風冷戦時代また来しか
霙るるや川越過ぎて東上線

大晦日それぞれの夜そして明日

モーロク俳句

十二月モーロクすれば昭和かな
モーロクしモーロクの夢十二月
バックしますモーロクすれば十二月
モーロクし歌うでもなし十二月
あるがまま暮らすモーロク十二月

モーロクし冬ぬくきこと不安なり
モーロクし最後の冬か暖かし

モーロクし行く先不明冬の蜂
モーロクし見えてきしもの藪椿

モーロクし疑心暗鬼に冬の薔薇
モーロクし遠火事全て無関心

モーロクしあるはずもなし隙間風
モーロクし口論の果て隙間風
モーロクしあの世と思う夜の寒さ

十二月八日今日も平凡モーロクし
モーロクし朽ち果てるかな浮寝鳥

おでん煮ておでんの夢をモーロクす
モーロクし見失う日のおでん酒
モーロクし波風立てず湯豆腐や

モーロクし笑ひ短かく冬ざるる
己が身もモーロクすれば冬ざるる

ポインセチアあの人この人モーロクす
ずわい蟹鋏はモーロク断ち切れず

モーロクしアンドロメダの凍空や

モーロクし冬晴れなれど不安あり

冬銀河未来あきらめモーロクし
モーロクし又モーロクし冬銀河
モーロクし星屑となる冬銀河
冬北斗躓き重なりモーロクす
モーロクし頼るものなく冬銀河

モーロクし靴下に穴大枯野
モーロクし枯れ行くものと一緒して
モーロクし迷子となりし枯野にて
モーロクしあの世の道か枯野ゆく
枯野原いつか魂モーロクす

モーロクし電気毛布にくるまって
毛布までヒートテックにモーロクし

モーロクし惑ひの年が暮れにけり

モーロクし年を惜しみて食べて寝る
独り言止まぬモーロク年の暮
モーロクし昼からお風呂年の暮
モーロクし無用人間年の暮れ
モーロクし年の瀬早く流れけり

モーロクし無縁となりし近松忌
モーロクし変哲もなく冬至風呂
モーロクし沈めて浮かし柚子湯かな
モーロクし波立て遊ぶ柚子湯かな

モーロクしふわりふらふら年暮る
モーロクし合わせる心年の暮れ

モーロクし腐り始めたクリスマス
モーロクしクリスマスイヴの大欠伸
モーロクし吾に無断でクリスマス
鰭酒にモーロク忘れ気を許す

モーロクし気短かき男虎落笛
虎落笛聞こえ齢とるモーロクす

着膨れておろおろおろとモーロクす

モーロクし無心となりて葱刻む
モーロクしされど酒好き白葱派
来世を信じモーロク葱洗ふ
モーロクしさびしさ後ろ葱畑

モーロクし冬木となれず冬木あり
モーロクし裸一貫大冬木

モーロクし知らぬが花のすき焼きを

モーロクし無の境地かな年を越す
モーロクし小さき歩幅に年を越す
モーロクし多くを忘れ年を越す

たべもの俳句

十二月駅弁を食ひたくなりにけり
十二月ぽん酢醤油が必需品

蓮根をただ焼くだけのステーキに
生揚げを焼けどその中雪のよう

プロポーズ忘れてしまったセロリかな
ぶり大根ご飯に酒にたっぷりと

鯖缶は便利なれども寒鴉
鯖缶をぱっぱと開けて寒鴉

冬晴やカレーに舌燃え神保町
キムチ鍋豆腐たっぷり冬ざるる
大根をポン酢漬けダレ十五分

はるさめと白菜あわせ和え物に
味つけは焼肉のタレ鰤竜田

焼藷や戦後食料スイーツに
運命か吊るし切られて大鮟鱇
鮟鱇の顔微笑みか悲しみか

バクダンはおでん限定日本かな
観音顔白菜並ぶ道の駅

白菜の歯ざわりやわらか豚しゃぶで
白菜に豚バラうまみすき煮鍋

極月ややはりマグロをアメ横で
牡蠣飯の牡蠣は小さくなりにけり

レシピより砂糖控えめ柚のジャム
レンジチン冬至南瓜こっくりと

おやつにもかぼちゃのいとこ煮風邪知らず
牡蠣フライダブルフライに挑戦す

大根をピリ辛味の悪魔漬け
しろたへの千枚漬を愛おしむ

鍋焼きに卵を落とし啜りけり

乾び鮭いまだ恨みの鮭の目や
乾鮭や吊されさらされ何恨む

喉滑る酢牡蠣の刺激やみつきに

葱生姜鶏雑炊で冬の夜
すき焼きは煮るか焼くのか議論して

戦争の終わらぬ年の晦日蕎麦